

---

# 交換

\_瑠姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交換

### 【Nコード】

N9196Z

### 【作者名】

— 瑠姫

### 【あらすじ】

双子の姉妹、莉愛と愛莉。仲のよい姉妹だったのだが…？  
— 応ホラーだったりします。

## 序章

あるところに莉愛りあいと愛莉あいりというとても仲のよい双子の姉妹がいた。

しかし似すぎていて親でも区別がつかない。

困った親は莉愛にツインテール、愛莉にポニーテールで髪を結った。

「これで区別がつくわ」

大人は皆、一安心だった。

それから10年の歳月が過ぎ彼女たちは16歳になった。

「莉愛〜愛莉〜起きなさい!」

1日はまず母の怒鳴り声で始まる。

『はい』

それぞれ別のところから返事をしているはずなのに

同じタイミングで返事をする。

これが双子というもの。

2人は諦めつつあるようだ。

『おはよ〜』

同じタイミングでこれまたリビングに着たから

母も驚いた。

それに彼女たちはまだ髪を結ってなかった。

「おはよう。コッチが…莉愛？」

「はーずれ！私は愛莉よ！」

そついいながら彼女たちは洗面所に行き

莉愛は2つに、愛莉は1つに髪を束ねるのだった。

しかし莉愛は髪を結おうとしない。

「ねえ、愛莉。今日数学のミニテストあるのよね〜」

愛莉も手を止め返事をする。

「あ、莉愛！あたしも国語のスピーチがあるの」

ソツクリな声で会話をする2人。

目をつむって聞いていると同一人物がしゃべっているようだ。

『交換しよ！！』

二人は同時に言ったことについてはあえて何も言わず髪を結うのを再開した。

ただし

莉愛はひとつに、愛莉はふたつに。

「おはよ〜」

彼女たちはこうして

莉愛は愛莉に、愛莉は莉愛になったのだった。

「きりっ」

【さよーならー】

学校が終わりガヤガヤと帰宅を初める生徒たち。

莉愛は得意科目の国語を愛莉の教室で完璧にこなし

愛莉は得意科目の数学のテストで100点を取った。

二人の少女はそれぞれ帰宅を始める。

ここから、ズレが始まった。

莉愛

最近暑くなってきたな

首に汗のせいでくっつく腰までのばしていた髪をかきあげる。

ポニーテールで首にくっつくから嫌よね。

愛莉は大変だ……

そうだ、愛莉を驚かせよう。

シュッとポニーテールをほどき

私は家の帰る道を引き返し

ある店に急いだ。



愛莉

シャキン、最後の音が聞こえた。

「終わりましたよ」

店員が声をかけてくれる。

「これでいいですかあ？」

「ありがとうございます」

会計をすまし私は店を出た。

そこから私は借りたいCDがあったことを思い出し  
店を出た向かいにあるビデオ屋に入った。



ズレ

莉愛

『じゃ〜んっ！』

帰宅してただいまも言わずにリビングのドアを開ける。

帰ってくる途中に切ってきた髪の毛を披露するためだ。

愛莉は驚くだろうな。

なんてたつて腰まであった長い髪を肩まで切ったんだから。

「おかえり莉愛……え!?!」

ふふ、やっぱり驚いている!?!

そういつてダイニングテーブルのところに行った愛莉をみる。

「…えええ！！？」

愛莉の髪の毛は腰までのポニーテール。

…のはずなのだが。

肩までバツサリと短くなっていた。

「なんで莉愛も切ってるの！？」

「愛莉こそ！…驚かせようと思って切ったのに…」

「莉愛も！？私ものにな…」

「え〜スゴイ偶然だね！どこの店で切ったの！？私は…」

『 整髪店！！』

私と愛莉は声をそろえて小さい頃から連れて行ってもらっている  
パーマ屋さんの名前を出した。

「さすが双子ねえ」

キッチンからお母さんのため息混じりの声が聞こえてくる。

そつだ、髪を結べなくなっただから

区別もつかなくなる…

そう思っていたとき愛莉がこっそり私に耳打ちした。

「これからは髪型かえなくても交換できるね」

お母さんには悪いけど

全くその通りだと思った。

愛莉

ビックリした…

莉愛もまさか髪を切ってるとは…

しかも同じ店で!!

あり得ないわ

いくら双子だからってさ

ん？

でも...

どうなんよ...

莉愛に「っそり言った。

「これからは髪型かえなくても交換できるね」

莉愛はコクツと小さく笑顔で頷いた。

さっきの撤回！

双子って便利だわ



男

愛莉と莉愛は髪を切ってから

ちよくちよく交換をするようになった。

しかしそれに気づく者など誰も居なかった。

髪型も背も性格も顔も。

全部一緒。

親でさえ区別がつかなくなっていた。

そんななか、事件は始まるうとしていた。

莉愛

「愛莉…ちょっといい？」

私は今、愛莉として愛莉の教室で愛莉の友達としゃべっていた。

そんななか一人の男に声をかけられた。

誰だコイツ…

そう思い名札をみる。

《浦山達也》  
うらやまたつや

聞いたことあるような…ないような？

でもソイツは私のことを愛莉だと思っているようだった。

なのでなんの警戒もせずに

彼の言うまま着いていった。

ズンズンと私の先を歩く彼。

ピタリと止まったその場所は

屋上へと続く階段の踊り場。

なんでこんなところに？

「どうしたの？こんなばしょで…」

愛莉がコイツと親しいか親しくないかなんてわかんないし

愛莉がコイツを何と呼んでるかなんて知らないから

とりあえずそれだけ聞いてみた。

背中を向けていた彼はクルリと振り返り

口を開いた。

「今度……」

今度？

「今度、俺と一緒に映画行かない？」

顔を背ける達也と呼ばれる人物。

ア――――

思い出した！

コイツ、学年一のモテ男クンだー！ー！！

「ん…ん」

愛莉らしく、愛莉らしく

心の中でずっと唱えていると

冷静になれた。

「デートってことかな？」

笑顔を作って聞く。

コクリと頷く達也。

その笑顔が引きつる。

始業のチャイムが鳴る。

「とりあえず…返事は後でいいよ…」

小さい声で言って教室に戻り始める達也。

私も階段を下り始める。

なんでなんで

達也は愛莉が好きなの？

学年一モテる達也が！？

愛莉もモテるの！？

意味わかんない

けど

わかる

誘われたのは愛莉だけど

それを知ってるのは私だけ。



とりあえず私は愛莉として

授業を受けるため教室に戻った。

爆弾は丁重に。

愛莉

「愛莉？ ちょっといい？」

部屋の扉が開く。

莉愛だ。

「ん〜？ どしたの、莉愛」

私と莉愛の部屋は隣同士で

時々莉愛が私の部屋に来る事もあった。

なんてっ たって莉愛の部屋は汚い。

汚い、という言い方は悪いかもだけど

ぬいぐるみとかポスターとか服とかでいっぱい。  
そのうえピンクなものしかないから目が疲れる。  
勉強道具はどこにしまっているんだ、って感じ。

そんな事を考えてると

莉愛が私の隣にちょこん、と座る。

「愛莉、達也って知ってる？」

私の目をじいっと見つめそう言っ莉愛。

「は？」

「達也！愛莉と同じクラスでしょ！？」

「うん、まあ…」

なにをいきなり言ってるんだろう。

達也は確かに同じクラス。

突然出された男の名前に何かあるんじゃないかと

脳みそフル回転で考える。

「ソイツと仲いいの？」

ちかくにあった雑誌を手に取り

ぱぱぱぱとめくりながら聞いてくる。

「うん、仲いいわけではないけど…なんで？」

いきなり部屋に来て雑誌読んで達也のこと聞いて

莉愛は何したいの？

「ふうん…まあいいや！」

バサツと雑誌を放り投げる莉愛。

「ちょっとお、人の本乱暴に扱うなっていつも――」

「あ、明日も交換しよ。」

言葉を途中で切られた上にお問い合わせするとは…

ふてぶてしい奴だ！！！

しかし明日は私も理科の実験の結果をまとめて発表する授業があったりする。

「…いいよ、バレないようにね！」

「愛莉もねっ！！」

そういつて部屋の扉を乱暴に閉め自分の部屋に戻る莉愛。

結局達也がどうしたの？

どうでもいいけどね…

最近、自分のクラスにいることより

莉愛のクラスにいることのほうが多かったです。

不便だったり面白かったり。

でも…私は愛莉…だか…ら…

そう考えながら私は眠りについた。

雄叫び

莉愛

呼び方は、達也<sup>たつや</sup>。普通に呼び捨て。

あまり親しい関係ではない。

小さいノートにそれを小さくメモした。

「ふう…」

愛莉がまさかあの達也にデートに誘われるとは…

有り得ないけれども。

有り得てることだから、受け入れるとして。



まだ、愛莉に達也にデートに誘われた事は言っていない。

愛莉が誘われたんだから愛莉に報告して愛莉が行くべきなんだろうけど。

まだ、言うべきときではない。気がする。

愛莉にいきなり達也のこと聞いたから怪しんできると思う。

もしかしたら明日、達也に直接聞くかもしれない。

だから、明日も交換する約束をした。

ノートをスクールバッグの奥にしまい、

ピンクのモフモフのベッドにダイビング。



しかしそれもあんまり気にしない。

ダメだ。

愛莉と達也が付き合うなんて…絶対ダメ…!!

愛莉は調子乗るに決まってる!!

自慢するに決まってる!!

絶対・断固・全力で

阻止する!!

とりあえず私は愛莉として明日も過ごすため

A組の明日の授業の教科書をスクールバックに詰め込んだ。



**B組での出来事。**

愛莉

最近は私が莉愛で莉愛が愛莉。

ってな感じになってしまっている。

A組の私はほとんど莉愛のB組にいる。

授業進度もほとんど変わらないから授業も理解できるし、

莉愛の周りの人にも気づかれていない。

莉愛の友達ともそれなりに莉愛のときと変わらない関係を維持している。

莉愛が私になつてるときに達也たつやと何かあつたのかも知れないけど  
まあたいしたことではないだろう。

私も莉愛になりすましているときに何にも起こらない。

莉愛と仲のいい友達2人と一緒にいる。

香野詩織かしのしおりちゃん、莉愛はしーちゃんと呼んでる。

市川麻友いちかわまゆちゃん、莉愛はまゆと呼んでる。

この2人と私はトイレに行ったり移動教室したりしてる。

何にも起こらない。

まあ、私が愛莉でいるときもそうだったけど。

「リア、次体育だよ？」

愛莉として考え事してるときに「リア」と呼ばれたもんだから

ビビったけど…

体育着を持ち

2人を追いかけて

教室を出た。

導火線に火を

莉愛

「達也たつやっ」

授業が終わり、放課後。

外は雨。

ココはA組。

愛莉の、教室。

そして私は莉愛。

私が呼んだのは達也。



達也は友達と帰宅しようとして教室の扉まで行った所だった。

そこを私が呼び止めたもんだからちよつと罪悪感。

しかし達也と帰ろうとしていた俊吾が

気を遣ってくれたのか1人で帰るといい、

達也は私のところに小走りできた。

ちなみに俊吾とは去年同じクラスであったりする。

まあ、どつでもいい。

「おっ…あつ…愛莉…？」

「あつえつと、この前の話なんだけど…」

達也が慌てるどころなんて始めて見た。

しかし教室の隅でヒソヒソとしゃべる声。

「なんなの愛莉…ウチらのたつつんに…」

「ブスが…調子乗ってんじゃないわよ」

教室の中で大きい声で読んじやったから

ちよい反感買ったっぽい。

あの追っかけ隊に…

あ、そうそう。達也はご存知の通りモテるから

ファンクラブがあるんです。

学年で目立つギャル系の子はクラス関係なく入っていて

それに入っている人が達也に話しかけると異端となり

いじめられたりハブかれたり。

入っていない人が話しかけると入ってる子に

いじめられたりハブかれたり。

【たつつん】なんて勝手にニックネームをつけちゃったりしてる。

気持ち悪い。

もちろん愛莉も私もファンクラブには入っていない。

そんなことを考えていると達也に手を握られた。

「ココだといろいろ言われるから…ね」

そういつて手を握ったまま

階段の踊り場まで走っていった。

「スゴイファンだね」

ちよつと嫌味。

なんであんなにいるのに愛莉なんか選ぶの？

「いや…で、この前の話…」

私はそのことを思い出しパツと笑顔を作った。

「あ、いいよ。映画。行こうかっ！」

少しの沈黙。

「…マジですか!!!?!」

それは達也の嬉しさ爆発！って感じの声で破られた。

「いついつにする！？」

「え…いつでも？」

そんなはじめてみる達也にちょっと戸惑いながら返事をしていく。

「ごっちゃって改めてみるとやっぱり美形イケメンね…」

長いまつ毛も白い肌も。

あれだけファンがいるのもわかる気がするわ〜

いつもはクールって感じなのに

目の前でキヤイキヤイとはしゃぐ達也を見て

なんかボーっとしていた。

適当に受け答えして

達也の言う事を聞き流していたら

9月15日土曜日の午前10時に映画館前で待ち合わせ。

「見る映画は俺が決めていい？」

「うん。」

という会話をしたらしく

当日まで決めておくといわれた。

「じゃあ…楽しみにしてるから」

そう言い達也は帰っていった。

無言で手を振る私。

約束…しちゃったよ…！

愛莉じゃないってこと、気づいてないの？

馬鹿なんじゃないのあの男は…！！

気づきなさいよ…！！

もういい、デート当日も私が行く。

愛莉として、デートやりきってやる…！

はりきりながらズンズンと階段を降りて

ズンズンと家に帰った。



## ブランドの服と変化

愛莉

「ただいまあ  
」

玄関から響くその声。

莉愛だ。

「お帰り！遅かったね、どこいつ  
」

リビングにいたので玄関まで出てみると

いつもの莉愛。

ただひとつ、違和感。

「なにその袋？」

スクールバックを持ってる反対の手で持っていたのは  
シヨップの袋。

しかも有名ブランド店のじゃないですか!!!

「ん〜？ちよつと買い物してきたの…あ〜いいにおい！」

パタパタと横を通り過ぎてキッチンに向かい

今日の夕飯のエビフライを口にくわえ

莉愛は自分の部屋に向かって

階段を駆け上がっていった。

最近莉愛は変だ

気づいていないと思うなよ

生まれてからずっと一緒にいたんだもの。

莉愛のことならわかる

髪を切ってからおかしい。

達也のこと。

ブランド服のこと。

交換する回数。

莉愛…

妹が通り過ぎた廊下に

何か落ちていることに気づいた。

それは、一枚の紙だった。

『呼び方は、達也。普通に呼び捨て。

あまり親しい関係ではない。』

と書かれた紙の裏をピラリとめくると

『9月15日土曜日。午前10時映画館前で待ち合わせ。  
見る映画……達也が決める。』

…なにこれ……

莉愛の…だよな

莉愛が私に達也のことについて聞いてきたのって

コレに関係あるの？

とりあえず見てはいけないものを見た気がして

紙は4つに折って制服のスカートのポケットに入れた。

「ふふ…っ」

思わず漏れた笑。

これから起こること

「楽しみ…」

ぼそりとそう呟き

私はリビングに戻った。

9月15日。

何にも予定はない。

莉愛…

隠そうとしたってわかるから。

だって私たちは

双子なんだもん。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9196z/>

---

交換

2012年1月1日01時01分発行